

ベリーシヨート賞

## 完全犯罪

野永孝平

私はニンジンが嫌いである。

ニンジンとは、いうまでもなく野菜のニンジンだ。何が嫌かというと、まずあの色。やや薄みがかった橙色は見るもおぞましく、視界に映っただけで食欲を減退させる。例え好物のお子様ランチであったとしても、もしチャーハンや付け合わせのサラダの中にあの毒々しい色を発見してしまえば、セットのおもちやを開封する興も削がれるというものである。そしてあの匂い。いくつもの野菜が入ったミックスジュースであっても、ニンジンの匂いはすぐに分かる。凶々しいことこの上ない。メロンパンのメロンの謙虚さを見習ってほしい。極めつけは味だ。あの独特の苦みは、一たび口に入れてしまえば私の繊細な味蕾みらいにしつかりと刻み込まれ、デザートに苺パフェが出たとしても消えることはない。キャロットジュースなど論外だ。あれをひと口飲むくらいなら、夜中に一人でトイレに行く方がマシである。

長々と自説を述べたが、私は別にニンジンに恨んでいるわけではない。私が敬愛してやまない某ヒーローの絵本に登場する「ニンジンさん」には一目置いているし、ひそかに慕っている幼稚園のケイコ先生が着用しているエプロンに刺繍されたニン

ジンのアップリケは、とつてもチャーミングだと思っている。というよりむしろとつて代わりた。

しかし悲しいかな、世の中には相性というものがあり、合わないもの同士を結びつけても、待っているのは悲劇だけである。離婚の理由第一位が「価値観の不一致」という事実は、もっと重く受け止められるべきだ。好き嫌いは悪くない。悪いのは、人の好みを無視して強要する人間である。

そして、その悪の筆頭たる人間が我が家にいる。ママである。この女は齢四十にして重度のテレビ中毒であり、エセ健康番組のあやしい解説を盲信する。「ニンジンに含まれるカロテンは、動物の体の中じゃできないの。だからいっぱい食べなさい」などと言って、夕食をニンジン尽くしにしたのにはさすがに閉口した。その時は、たまたま皿に盛られたニンジンのグラッセをペットのビリー（ゴールデンレトリバー三歳オス）のエサに混ぜようとした。それが発覚し、お小遣い三か月なしの刑に処されたことは軽いトラウマである。

前置きが長くなった。本題に入ろう。

私は今、ダイニングルームで夕食の席についている。今晚の献立は、ハンバーグステーキ、ポテトサラダ（交渉の成果によ

り、具材にニンジンが入っていない)、ご飯、味噌汁、牛乳、そしてカップアイスである。目の前の皿はあらかた片付いている。あとはとっとと好物のアイスを食したいのだが、看過できない懸案事項を抱えていた。

みそ汁の具が、ニンジンだったのである。

私は視線でママに抗議した。しかしこの冷血な女は、しれっとした顔で言う。

「ほんのちよつとでしょ。さつさと食べちゃいなさいよ」

確かに、ほんのちよつとではある。私のお椀によそられた味噌汁に、ニンジンは三切れしか入っていなかった。鼻をつまみながら汁と他の具材を片付けたので、お椀の中に残っているのはニンジンだけである。しかし、量の問題ではないのだ。フグの毒であるテトロドトキシンは、わずか二ミリグラムで人を死に至らせるのだという。私にとってニンジン三切れは、もはや致死量に等しい。

何とかして、処分できないだろうか……。

命の危機を前にして、私の頭脳は高速回転していた。これほど集中するのは、お遊戯の時間でケイコ先生といっしょになつたとき以来である。

まずは現況の確認だ。ダイニングの中を冷静に見回す。私とママは向かい合わせで座っている。ママは自分の食事を終え、私が食べるのをじっと見ている。否、監視している。この部屋にゴミ箱はない。ニンジンを処分する場所は、ママの背後にある流し台の三角コーナーしかない。ママがさつきまで調理して

いたはずなので、三角コーナーにニンジンを捨ててしまえば、野菜くずに混じって犯行がばれることはないだろう。問題は夕イミングだ。

私は正面に座るママの顔をそつと窺った。「ニンジン食べるまで離れないわよ」という固い意思が感じられる。私は、膠着状態を打開するために口を開いた。

「今日さ、園長先生にほめられたんだ」

「へえ、何かあったの」

「うん、うめ組にこーすけ君つて子がいるんだけどさ、お昼ごろに泣いてたから、話を聞いて、なぐさめてあげたんだよ。おかげでお昼寝の時間がつぶれちゃったけど、園長先生は『よくやった』ってほめてくれた」

「そう、良かったじゃない」

ママの口元がほころぶ。

「だからさ……ニンジン残してもいい？」

「何バカいってるの」

交渉失敗。目がまったく笑っていなかった。

その時、玄関のチャイムがピンポンと鳴った。ママは、「はい」と返事をして、玄関に向かっていく。チャンスだ。ママがダイニングを出て、廊下を曲がったのを確認した瞬間、私は動いた。

時刻イチキュウサンマル。オペレーション・デルタ<sup>三角</sup>コーナー<sup>コーナー</sup>を開始する。

ニンジンの入ったお椀を持ち、椅子から立ち上がりうとして、

私は足が震えていることに気付いた。

おびえているというのか、この私が。否、これは武者震いだ。勇を鼓舞するため、私は脳内でBGMをかけた。壮大なメロディが心を熱くする。

アン○ンマンハ、キミッサ〜♪

そうだ。私はアン○ンマンだ、私はアン○ンマンだ……。

いつしか私の魂は、大空を飛翔する頭部がアンパンの英雄と同化していた。愛と勇気さえあれば、恐れるものなど何も無い。迷いのない足取りで、テーブルをぐるりと回り、流し台の前に立つ。ぐいっと首を伸ばして、三角コーナーを覗きこんだ。

愕然とした。三角コーナーのなかには、野菜くずはおろか、一片のゴミも入っていないかったのである。調理後に、中のゴミをどこかに移していたのだ。

これでは、ニンジンを捨てたとしてもすぐにばれてしまう……。どこか、他に捨てる場所はないだろうか。

危険を承知でリビングに捨てに行くか、と逡巡した時、廊下をどたどたと歩く音が聞こえてきた。ママが戻ってきたのだ。バカな、早すぎる。椅子に戻っている時間はない。私はニンジン入りのお椀を持ったまま固まった。

「夕食どきに配達に来なくてもいいのにな……まったく。あら、あんた何してるの?」

「いや、のどがかわいたから水を飲もうかと思って……」

「本当? ニンジンを捨てようとしたんじゃないわよね?」

するどい。しかし備えはしてあった。

私は、牛乳が入っていたコップを掲げる。お椀は、すばやく机の上に戻していた。危ないところだったが、念のために空のコップをいっしょに持っていたのが奏功した。ママは胡乱げな目つきだったが、納得してくれたようだ。

「水でいいの?」

「オレンジジュースがいいな」

しょうがないわねえ、とつぶやきつつも、ママはパック入りのオレンジジュースを出してくれた。何気ないしぐさでパックの形状を確認するが、この中にニンジンを仕込むのは難しそうだ。あきらめてストローを指し、さわやかな酸味を味わう。緊張でかわいたのどがうるおった。

椅子について一息つく。危地を脱したものの、問題が解決したわけではない。依然として、目の前のお椀にはニンジンが残っている。

「早く食べちゃってよ、片付かないでしょ」

ママの声に険がこもる。このままでは無理やり口に突っ込まれかねない。

「ねえママ、知ってる? 人はもともと肉食動物なんだよ。ほら、このとがった歯、犬歯っていうんだって。イヌは肉食でしょ」

私は口を開けて、肉食嗜好の生物学的正当性を主張する。

「これは、おとうさんに話すしかないかなあ」

くそ、話が通じない。しかしまずい。親父は怒るとママ以上に怖いのだ。

とその時、リビングの方から声がした。

「母さん、洗濯したYシャツ、どこにあるのー？ 明日仕事で着るんだけど……」

「はい。まったく、うちはお子様ばかりなんだから……」

「ねえ、今の……」

私は、呼び出しを受けて立ち上がったママに声をかける。

「本気よ。でも、このニンジン食べられたら何も言わないで置いてあげる。わたしだつて相談したくないもの、こんなこと」

そう言い残して、再び部屋を出ていく。今度の行き先はリビングだ。恐らくそう時間はかかるまい。

ママが姿を消してから、私は再びダイニングルームを見渡し、三角コーナーに捨てるのはだめだ。どこか、どこか別の場所……。

思案中に暮れる私の視界に、食べ終わったカップアイスの容器が映る。瞬間、天啓がはしった。

「まったく、着るものくらい自分で探さないよね……。あら、ニンジン食べたの？」

ママはダイニングテーブルの上を見て、少し驚いたように言った。私は得意げに頷く。お腕の中から、ニンジンは失われていた。

「食べられるんならさっさと食べなさいよね。じゃあ、片付けちゃうわね」

ママはそう言って、机上の食器を重ね始めた。私は、内心ほ

くそ笑んでいた。どうやら企みは上手くいったようだ。

ママが重ねた食器を持ち上げようとして、手をすべらせた。開封済みのカップアイスの容器が、板張りのフローリングに落ち、プラスチック製の蓋が外れた。ママは身をかがめて、拾おうとした。

あの角度では、一〇〇パーセント中身が見える。

心臓の鼓動が速くなり、冷汗が背を伝った。

ママが、空であるはずの容器の中を覗き込んだ。

「このアイス、ポイントを集めたらお皿がもらえるんだ……」

ママが見ていたのは、カップの裏に記されたキャンペーンの広告だった。そのまま、何も無かったかのように空のカップを流しの三角コーナーに捨てた。続けて食器を手早く洗う。

「じゃあ、そのアイス食べ終わったら、ちゃんとカップを捨ててね」

「分かってるよ」

私は食べかけのアイスを手にして、頷いた。ママはダイニングを後にする。私は心中で快哉かいさいを叫んだ。

ニンジンをそのまま三角コーナーに捨てれば、当然はれてしまう。ならば、ニンジンを何か別のもので覆ってしまえばいいのだ。三切れのニンジンは今、私が食べているアイスの底に埋まっている。ニンジンだけを器用に分けて、アイスを食べていく。

最初は、ママが食べた容器の中にニンジンを隠そうと思った。

しかし、それでは、何かの拍子に中を見られる可能性がある。実際、さつきママが床に落として蓋が外れ、カップの中身が覗かれた時は、最初の思い付きに従っていたらどうなっていたとかと肝を冷やした。とっさに作戦変更した私の機転の勝利である。私は悠然と最後のひと口を食べ終え、エンジンを残したまま、アイスの蓋をしっかりと閉じ、紙製のスプーンといっしょに三角コーナーに捨てた。これで、エンジンを捨てたことがばれることは永久にない。

リビングに行くくと、私がひいきにしているアニメ番組が始まる時間だった。私はテレビをつけ、アニメのOP主題歌を聞きながら完全犯罪の成功に酔いしれた。

その時、リビングにいた青年がママに話しかけた。

「そういえば母さん、アイスの容器、とつといてある？」

「え、何に使うの？」

「キャンペーンに応募したいから集めてるって、話しただろ」

「そうだったっけ？ あー、ごめんごめん。捨てちゃったわ。

流しのところにあると思うから、洗って使って」

「えー、しょうがないなあ」

青年は、リビングを出て、ダイニングに向かった。

「あれ？ ちょっと、父さん、またエンジン残しただろ」

ダイニングで響く息子の声を聞いて、私の目の前にいた妻は顔を赤くした。

「ちょっとパパ!! 幼稚園の先生が好き嫌いしちゃだめだって、

いつも言ってるでしょ!!」

ベリーショート賞『完全犯罪』